

街のオアシス 再発見

第12回



サクラの名所 中島公園(札幌市)

森林インストラクター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを勤め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

水鳥が憩う大きな池の周りを散策する人が絶えない札幌市中央区の中島公園。春風に水面が揺れ、照り返す光がまばゆくなり始めました。

この菖蒲池^{しょうぶいけ}はかつて豊平川上流から搬送した木材の貯木場でした。同川から分流した鴨々川が今も園内を流れ、池に水を注いでいます。

周囲には、明治期の洋風建築で国の重要文化財に指定されている豊平館や、日本庭園、札幌コンサートホールKitara、道立文学館があり、歴史的、文化的な雰囲気漂わせています。

そんなエリアがこれから一気に華やぎます。その主役はサクラです。野生種から園芸種までさまざまな種類が4月下旬から5月中旬にかけ、時期をずらしながら咲き続け、市民の目を楽しませてくれます。



かつては貯木場だった菖蒲池

美しいサクラ並木

札幌パークホテルの裏手から地下鉄幌平橋駅へと南北に続く遊歩道は、美しいサクラ並木です。北側はソメイヨシノ、南側にはエゾヤマザクラが植えられています。

札幌でのソメイヨシノ開花は以前、大型連休中だったのですが、温暖化の影響か、近年は連休前になる傾向が強まっています。エゾヤマザクラより咲く時期が少し遅いため、遊歩道は南から北へとサクラ色に染まります。



遊歩道沿いに咲くソメイヨシノ

ソメイヨシノはエドヒガンとオオシマザクラの雑種で、接ぎ木で増やしています。従って、全国どここの木も遺伝子が同じで、花はいずれも白っぽい色をしています。同じ土地ならば、一斉に花開します。

それに対し、野山に自生するエゾヤマザクラは、ピンク色が濃かったり薄かったり。咲く時期も微妙に個体差があります。

開花前の冬芽を見ると、エゾヤマザクラは無毛ですが、ソメイヨシノは表面に毛が生えています。

また、エゾヤマザクラは葉と花が同時に開くのにに対し、ソメイヨシノは葉が出る前に花が咲きます。そして冬芽同様、エゾヤマザクラの花と葉の柄は無毛ですが、ソメイヨシノはいずれも毛があります。

日本庭園のシダレザクラもソメイヨシノとほぼ同じ時期に咲きだします。枝が垂れ下がり優美な姿ですが、シダレザクラという種類ではありません。ソメイヨシノの親であるエドヒガンのうち、枝が垂れた栽培品種をシダレザクラと呼んでいます。

本州で有名なサクラの大半はエドヒガンです。北海道には自生していませんが、シダレザクラを観察すればエドヒガンの花の形状を知ることができます。



日本庭園のシダレザクラ

遅咲きのサクラも

ソメイヨシノが散ったところに咲きだすのがカスミザクラです。中島公園駅からコンサートホールへ向かう途中、藤棚を抜け、橋を渡った左手に植えられています。白っぽい花で、遠くから見ると霞がかかっているように見えることから霞桜といわれています。

やはりソメイヨシノより少し遅れて開花するのがオオシマザクラです。文学館近くの遊歩道沿いにあり、周りのサクラが散る中、ひときわ目立っています。

伊豆大島に自生していたことが名前の由来で、北海道には分布していません。ソメイヨシノの親であるほか、塩漬けた葉が桜餅に使われることで有名です。

桜餅に使われるのは葉が大きくて柔らかいからです。独特の葉の香りはクマリンという物質です。葉の周りのギザギザ（鋸歯）は先が糸のように細くのびています。

5月中旬、野生種で最も遅く花開くのがミヤマザクラです。オオシマザクラの近くや四翁表功之碑裏手の菖蒲池沿いにあります。

山深い山地に咲くことからつけられた名前で、北海道でも自生しています。葉が出てから満を持したように開花します。数個の小さい花が房状に立ち上がっているように見えます。

一方、園芸種で遅咲きのカンザンは天文台の北側にたくさん植えられています。八重咲きの鮮やかなピンク色は見ごたえ十分。枝はまっすぐ伸びず、湾曲するのが特徴です。

春を告げる和洋菓子などにサクラの花びらが使われていますが、その大半はカンザンです。開きかけの花を塩と梅酢に漬け食用に加工します。あでやかな花は人々の食をそそるのにも役立っています。



遅咲きのミヤマザクラ



美しい八重咲きのカンザン

緑地を彩る花木

4月中旬、中島体育センター前の緑地で、ほかの木々に先立って咲くのがキタコブシです。コブシより葉や花がやや大きい北海道に分布する変種です。秋に赤い握りこぶしのような実がつくことが語源とされています。

6枚の白い花びらが開き、花の脇から小さな葉が1枚出てきます。中国原産のハクモクレンと似ていますが、ハクモクレンはキタコブシより開花が遅く、ボリューム感があり、花卉はあまり開きません。

キタコブシのつぼみの先端はいずれも北を向いています。山で道に迷ったときには磁石代わりにする方向指標植物です。ハクモクレンも開花前は北を向いています。

5月中旬、ベニバナトチノキが同じ緑地で開花します。セイヨウトチノキ（マロニエ）とアカバナアメリカトチノキの雑種で、街路樹でよく見るトチノキは円錐状に白い花をたくさん付けますが、ベニバナトチノキはピンク色です。

葉はトチノキより小さく、ふちのギザギザ（鋸歯）はより荒くなっています。実の表面にはトチノキにない刺が付いています。

札幌では中央区の龍谷高校前にある北4条通に約60本植栽され、みごとな並木道になっています。



春を告げるキタコブシ

狭い三角地帯の石碑

パークホテルの東隣、南10条西2丁目は、3方を道路に囲まれた小さな三角地帯です。そこに木下弥八郎^{きのした や はちろう}の石碑が立っています。

但馬国（現兵庫県）豊岡藩の家老だった弥八郎は、尊王攘夷で討幕を支援し、桂小五郎^{かつら こ ごろう}（木戸孝允^{き ひと たかよし}）の面倒を見たこともあり。1882年家族らとともに登別に入植し、1905年80歳で死去します。1919年には勤王家として正五位が贈られました。

これに感激したのが道東選出の衆議院議員だった長男成太郎^{しげ た ろう}です。建碑を決意しますが、作業は難航しました。同じ政友会の首相原敬^{はらたかし}に碑文を依頼するものの、原は1921年に暗殺され、未完となります。

碑文作成を友人らが引き継ぎましたが、完成した原稿は1923年の関東大震災で焼失します。遺稿の断片をまとめ上げ、ようやく除幕式が行われたのは、贈位から10年後の1929年11月30日でした。

建設地は成太郎宅前の市有地。北側には交番があり、西側には路面電車が走っていました。

碑文には札幌の住居で没したと書いてありますが、札幌に住んだことはなく、亡くなったのは登別です。札幌に無縁で無名な人物にもかかわらず、この地に碑が建てられたのは、政友会北海道支部長を約20年間務

めた成太郎の政治力と無関係ではなかったでしょう。

さすがに、納得しない住民もいたようです。2年後の1931年に発行された「現代札幌人物史」には、成太郎についてこう書かれています。

「遊園地交番の横自邸前の市有地へ、厳君の記念碑を建て、市民の抗議^{ごうぎ}如きは馬耳東風に聞き流し平然たる態度は、氏の性格を如実に物語るが如し」



木下弥八郎の石碑

石碑の建て主は銅像に

成太郎は政治家である一方、大東文化学院（現大東文化大）、帝国美術学校（現武蔵野美術大）の創設にもかかりました。

1940年、政友会と民政党の二大政党は解党し、大政翼賛会へ合流します。これに伴い、成太郎が支部長だった政友会北海道支部も解散しました。成太郎を慕う道会議員らが1941年、喜寿を記念する寿像建設と伝記の発刊を企画します。寿像とは本人が活着している間に作る像のことです。

銅像の制作は彫塑界の巨匠、朝倉文夫^{あさくらふみお}、台座の碑文は漢詩壇の第一人者、土屋久泰^{つちやひさやす}が担います。像も碑文も大東文化学院のつながりで依頼したものです。

しかし、1941年12月には太平洋戦争が勃発、銅像を作るような社会情勢ではなくなります。それでも断行され1942年8月10日、菖蒲池東側にあった拓殖館の横で除幕式が行われました。現在は木々に囲まれて目立たず、ひっそりしていますが、拓殖館は博覧会や品評会の会場となった公園の主要施設でした。

基壇は高さ77センチ、幅750センチ、奥行き382センチというステージのような広さ。中央の基台は高さ179センチ、幅120センチ、奥行き120センチで、前面に碑文が刻まれています。石は岡山県産の万成石^{まんなりいし}と呼ばれる花こう岩で、サクラ色があった美しさから、日本の銘石とされています。

その上に載るのが成太郎の座像です。和服姿で膝に手を当て、りりしい表情で正面を見据えています。像の高さは162センチ、地表からは418センチにもなります。



木下成太郎の顕彰碑

豪華な寿像の完成を見届けた成太郎は3カ月後の11月、77歳で亡くなります。翌年になると戦時下の統制が一段と厳しくなり、各地で金属回収が相次ぎます。札幌ではクラークや黒田清隆^{くろだきよたか}らの銅像が供出されましたが、なぜか木下像はその対象となりませんでした。

朝倉が制作した全国の銅像もその多くが供出されたため、木下像は現存する貴重な朝倉作品として美術関係者の関心を集めています。



朝倉文夫作の成太郎像